

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	高橋 真理子
論文題目	A Comparative Study of Tag Questions and Invariant Tags in Asian Englishes: A Corpus-Based Analysis （アジア英語における付加疑問文と不変化タグの比較研究：コーパスに基づく分析）		
（論文内容の要旨）			
本論文は、アジア英語における付加疑問文（tag question）と不変化タグ（invariant tag）の種類およびその機能を記述・比較した実証的研究である。 第1章では、序論として研究の目的、先行研究の紹介、研究の意義、が述べられている。 第2章では、まず研究のテーマと関連する世界英語（World Englishes）の概念およびその分類が扱われている。つまり、印欧語に属する英語という言葉が世界各地に広まり、第一ディアスポラが北米、オーストラリア、ニュージーランドに、第二ディアスポラがアフリカ、アジア諸国に成立し、両者はそれぞれThe Inner CircleおよびThe Outer Circleと呼ばれ、公用語としての英語が前者では第一言語、後者では第二言語として使用されるようになった歴史的経緯が説明されている。また、英語が公用語としては認められていない地域としてのThe Expanding Circleが紹介されている。 第3章では本研究の方法論が扱われている。まず、分析対象としてThe Inner Circleにカナダ英語、The Outer Circleにアジア英語（香港英語、フィリピン英語、インド英語、シンガポール英語）を選んだ理由として、本研究が依拠するICE（The International Corpus of English）コーパスにおいてカナダ英語コーパスがアジア英語コーパスと同じ構造・データ形式を持ち、量的比較研究において比較対象として適していること、また4つのアジア英語が種々の独自の特徴を発展させていることが挙げられている。The Expanding Circleにおける日本英語の選択理由として、本研究が日本において行われ、分析に使用される日本英語の資料が豊富であることが挙げられている。この章ではさらに、本研究におけるAntConcソフトウェアによるコーパスからの付加疑問文、不変化タグの抽出方法が説明されている。 第4章ではアジア英語における付加疑問文を、極性（polarity）の観点から、極性一致（肯定—肯定、否定—否定）、極性不一致（肯定—否定、否定—肯定）に分類しその用例数を調べた結果、香港英語とシンガポール英語はフィリピン英語、インド英語、日本英語、カナダ英語に比べ付加疑問文に占める極性一致の割合が統計的に有意に高く、この点に関して前者が後者に対し、よりネイティブ英語であるカナダ英語から離れていることを明らかにしている。さらに、最も頻度の高いタグは前者、後者それぞれis it, isn't itであり、すべての英語においてタグの補助動詞としてbe, doが、			

代名詞としてit, youが最も高い使用頻度を示し、補助動詞、代名詞に関する主節とタグの一致度は、カナダ英語、日本英語、フィリピン英語、香港英語、シンガポール英語、インド英語の順であり、この点に関しては日本英語、フィリピン英語、香港英語がネイティブ英語により近いことを指摘している。

また、付加疑問文の機能面に関しては、情報取得 (Informational)、確認 (Confirmatory)、促進 (Facilitative)、強調 (Attitudinal) を主要機能とし、アジア英語では「情報取得」の機能を担う付加疑問文の割合が最も低く、この機能に関しては香港英語、シンガポール英語の割合が、「確認」に関しては香港英語、シンガポール英語、カナダ英語の割合が、「促進」に関してはインド英語、カナダ英語の割合が、「強調」に関してはフィリピン英語、インド英語の割合が高いことを明らかにしている。テキストの種類に関しては、付加疑問文は書き言葉に比べ話し言葉で多用され、フィリピン英語、カナダ英語は香港英語、インド英語、シンガポール英語に比べ公的会話 (public dialogues) において使用頻度が高いことを指摘している。

第5章ではアジア英語における a, accha, ah, ahn, ano, ba, di ba, e, eh, ha, haan, hah, hai na, hindi ba, hor, huh, la, lah, lang, leh, lo, lor, mah, meh, na, na lang, naman, ne, no, 'no, okay/OK, right, see, wah, what, yeah, yes, you know, you seeという39形式の不変タグを扱っている。これらのタグは地域固有 (indigenous invariant tags) と各英語間に共通の不変タグ (non-indigenous invariant tags) という2種類に大別され、アジア英語の中でもシンガポール英語とフィリピン英語では地域固有の不変タグが高頻度で用いられ、また、各英語において地域固有の不変タグは英語間に共通のタグに比べてよりインフォーマルな状況において用いられる傾向にあり、地域固有のタグは英語間共通のタグでは表現しきれない態度の微妙な差異を表現することが可能であることを指摘している。

第6章では日本英語における付加疑問文と不変タグが扱われている。日本英語では付加疑問文の使用頻度は極めて低く、さらに英語のレベルが高くない話者グループではほとんど用いられないこと、極性分布については極性不一致の割合が高いフィリピン英語、インド英語、カナダ英語に類似していること、補助動詞、代名詞に関してはそれぞれbe, doおよびit, youにほぼ限定されており、機能面では他の機能に比べ促進 (Facilitative) の割合が極めて高いことが日本英語の特徴であることを指摘している。

第7章は本論文の要約であり、第1章から第6章までの結果を再度まとめた上で、総合的な考察を行っている。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、アジア英語における付加疑問文 (tag question) と不変化タグ (Invariant tag) に関する、第二言語として当該地域で使用され、The Outer Circle (外的サークル) の英語に分類される4つのアジア英語 (香港英語、フィリピン英語、インド英語、シンガポール英語)、英語が外国語として学習されているThe Expanding Circle (拡張サークル) の日本英語、およびそれらのアジア英語とネイティブ英語の比較のために考察に加えられたカナダ英語の、統語的特徴および意味論的機能の分類というsyntax, semantics 2つの分野にまたがる実証的研究である。

本論文の学問的貢献として、まず、付加疑問文を極性 (polarity) の観点から、極性一致 (肯定—肯定) と極性不一致 (肯定—否定) に大別し、香港英語とシンガポール英語はフィリピン英語、インド英語、日本英語、カナダ英語に比べ付加疑問文に占める極性一致の割合が統計的に高いことを明らかにし、その結果に基づき、極性に関して香港英語、シンガポール英語はフィリピン英語、インド英語、日本英語と比べよりネイティブ英語から離れていることを統計的に示したことが挙げられる。

さらに、極性の一致、不一致と関連して、最も頻度の高いタグは香港英語、シンガポール英語ではis it, フィリピン英語、インド英語ではisn't itであり、タグの補助動詞としてはbeに次いでdoが、代名詞としてはitとyouの使用頻度が高く、主節の主語と動詞とは無関係に付加疑問文において補助動詞be, do、代名詞it, youが用いられる場合が見られること、また、補助動詞、代名詞に関する主節とタグの一致度は、カナダ英語、日本英語、フィリピン英語、香港英語、シンガポール英語、インド英語の順であり、この点に関しては日本英語、フィリピン英語、香港英語がネイティブ英語に近く、シンガポール英語、インド英語はネイティブ英語から離れていることを指摘したことも本論文の大きな貢献である。

また、情報取得 (Informational)、確認 (Confirmatory)、促進 (Facilitative)、強調 (Attitudinal) に区分される付加疑問文の主要機能について、すべての英語においてこれらの機能が確認されるが、香港英語、シンガポール英語では情報取得、確認が極性一致の付加疑問文によって、インド英語では促進、強調を表すために付加疑問文が用いられ、このことから前者 (香港英語、シンガポール英語) と後者 (インド英語) には付加疑問文の使用目的に関して相違点があり、さらに前者では極性一致と不一致の付加疑問文が担う機能が区別されていることを明らかにし、テキストの種類に関しては、付加疑問文は書き言葉に比べ話し言葉で多用され、フィリピン英語、カナダ英語では、香港英語、インド英語、シンガポール英語に比べ公的会話 (public dialogues) において使用頻度が高いことを指摘したことも本論文の大きな貢献である。

不変化タグについては、アジア英語における a, accha, ah, ahn, ano, ba, di ba, e, eh, ha, haan, hah, hai na, hindi ba, hor, huh, la, lah, lang, leh, lo, lor, mah, meh, na, na lang, naman, ne, no, 'no, okay/OK, right, see, wah, what, yeah, yes, you know, you seeという39の形式を、地域固有および各英語間に共通という2種類に大別し、アジア英語の中でもシンガポール英語とフィリピン英語では地域固有の不変化タグが高頻度で用いられ、また、各英語において地域固有の不変化タグは会話、台本のないスピーチなどの状況において多く出現し、英語間に共通のタグに比べてよりインフォーマルな状況において用いられる傾向にあること、さらに、同意の催促、確認、主張の強調などの機能は英語間共通のタグに共通して見られるが、地域固有の不変化タグは英語間共通のタグでは表現しきれない態度の微妙な差異を表現することが可能であることを指摘した点も評価に値する。

最後に、日本英語では付加疑問文の使用頻度は極めて低く、さらに英語のレベルが高くない話者グループではほとんど用いられないこと、および極性分布については極性不一致の割合が他の英語に比べて高いフィリピン英語、インド英語、カナダ英語に類似し、補助動詞、代名詞に関してはそれぞれbe, doおよびit, youにほぼ限定されており、機能面では促進 (Facilitative) の割合が極めて高いことを日本英語の特徴として指摘したことも本論文の大きな貢献と言える。

本論文は対応例の精緻な統計的分析に基づく対照言語学の分野における実証的研究としての貢献において高く評価される。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成28年1月14日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 平成28年 3月 24日以降